



これまでに聴いたドイツ語 とフランス語の歌曲

文学部 三野 豊浩

愛大に奉職して以来一貫して中国語の科目を担当して来た私ですが、授業を離れた趣味の時間も中国語の歌を聴いているかという、そうでもありません(テレサ・テンの歌は好きです)。実はかつて音楽家を志していた時期があり、音大受験のための勉強をしたこともあります。結局受験はしなかったものの、この時期に学んだあれこれは今でも私の音楽理解の基礎を形成しています。そんなわけで、趣味で聴く音楽はむしろ西洋の古典音楽(クラシック)が主流。はた目には専門と趣味が分裂していると思われても、やむを得ません。今回は、これまで聴いたことのあるドイツ語とフランス語の歌曲(主にピアノ伴奏付きのもの)について、気ままに書いてみたいと思います。

それでは、まずドイツ語の歌曲から。若い頃クラシック志向の強かった私は、学生の頃からドイツ・オーストリアの歌曲に親しんでいました。高校生の頃は器楽一辺倒で、モーツァルトやベートーベンのソナタを夢中で弾いていましたが、大学に入学した頃から、徐々にピアノ伴奏付きの歌曲に関心が移って行きました。モーツァルトなら「春へのあこがれ」、ベートーベンなら「アデライーデ」が好きです。とはいえドイツ語は学校できちんと学んだことがないので、文法はいまだによくわかりません。アイネクライネナハトムジークの意味がわかる程度でしょうか(笑)。単語なら辞書を引けばわかりますからね。

話を戻しましょう。そんな私ですが、学生時代はロマン派の音楽が好きで、もっぱらシューベルトやシューマンの歌曲に親しんでいま

た。一番好きな作品をあげるとすれば、前者なら「冬の旅」、後者なら「詩人の恋」でしょうか。どちらも失恋した主人公の心の諸相をうたう連作歌曲で、思えば暗い学生時代でした(笑)。やや後では、これにブラームスが加わります。「日曜日」という歌は素朴な民謡風で、印象に残りますね。ブラームスにはこの他「マゲローネのロマンス」という大作があります。朗読と歌唱が交互に繰り返され、中世の騎士が冒険の末に美しいお姫様とめでたく結ばれるという、昔の少女マンガのようなお話が展開されます。

他には、バッハ、ハイドン、メンデルスゾーンなど。バッハはミサ、オラトリオ、受難曲、カンタータといった大規模な作品をたくさん残していますが、「アンナ・マグダレーナのためのクラヴィーア小曲集」に収録された小さな歌曲の中にも佳作があります。ハイドンの歌曲はややマイナーですが、旧オーストリア国歌「神よ皇帝を守りたまえ」はエリー・アメリングの歌で聴くと本当に美しい。メンデルスゾーンならやはり「歌の翼に」でしょう。比較的簡単な曲は、自分でピアノを弾きながらメロディーを口ずさんでみたりもします。ただ声楽をちゃんと学んだわけではないので、人前ではちょっと…。この他、フィッシャー・ディースカウが歌ったレーヴェのバラードのCDも持っていますが、あまり聴いていません。これはメロディーの美しいシューベルトなどと違って、ドイツ語がちゃんと理解できないと楽しめない音楽だと思えます。今よりドイツ語がわかるようになれば、面白くなって来るのかも知れませんが。

次に、フランス語の歌曲です。実は学生時代、第三外国語としてフランス語をほんの少しだけかじったことがあります。しかし名詞に男性女性の区別がある上に、活用が面倒、おまけに時制も複雑なため、早々と挫折してしまいました。何よりその頃は中国語の習得に必死だったので、「あぶはちとらず」になってはいけないという判断も働いたのでしょう。それでもその

後、「フランス語をもう少しちゃんとやっておけばよかった」という思いは、ずっと心の片隅に残り続けました。

ドイツ歌曲に比べると、フランス歌曲に目覚めたのはやや遅いです。最初にいいなと思ったのはフォーレの歌で、歌曲全集のレコードを買って来て、飽きもせず聴いていました。「夢のあとに」や「月の光」はとても美しいですね。他には、ドビュッシー、ラヴェル、プーランクなどの作品を聴いています。それぞれに面白いのですが、時代が進むにつれて音楽も複雑になり、時に私の理解を超えることもあります。他には、サティの「お前がほしい」。これはおなじみのポピュラー名曲ですね。CMで流れたりもします。

ドイツ語にせよフランス語にせよ、言葉がわからなくても音楽として楽しむことはできますが、やはりそれでは隔靴搔痒(かっかそうよう)という場合も多々あります。残りの人生の時間で、少しでも言葉への理解を深めることができればと思っています。

最後に一言。中国語は母音も子音もたくさんあり、中にはドイツ語のウムラウトのような音や、フランス語の鼻母音のような音も含まれています。ですから中国語をしっかりやっておくと、他の語学にも応用できます(文法はともかく)。学生の皆さんも、中国語の発音をしっかり練習してください。ということで、最後はうまく中国語に落ち着くことができました。



メシアン、プーレーズ、シュトックハウゼン、ノーノ。西洋クラシックの現代音楽家達です。80年代のポストモダン思想流行の後、日本の若者はみな大衆化して、「マンネリ化した文化」批判＝思想運動でもあった現代音楽も聴かなくなったと言われますが、如何でしょう？ 今回紹介する20世紀前半ウィーンの作曲家アーノルト・シェーンベルク 1874-1951は、その運動の開祖様です。



アーノルト・シェーンベルク
(1874-1951)

総毛立つ瞬間って在りますね？ 授業で「エヴァンゲリオン」を見せたら、学生が「悪寒が背中を何度も走った」と感想を書いてました。「君って嫌いだな」「悪いけど貴方が嫌いなもの」といろんな人の声が入って、その声を聞く碇しんじ君は、「どうせみな決まっている世界だろ！」と悲鳴のように叫びます。音楽をそんなヒステリーの状態に置いたのが、シェーンベルクだと思うと良いでしょう。30分以上の器楽曲を聞くのは辛いけど、恐怖映画のBGMとしてなら最高です！

キューブリックの「スペースオデッセイ」に使われたリゲティの「アトモスフェール」の方